大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究

――岩手県大槌町「生きた証プロジェクト」を事例として――

○岩手大学　　麦倉　哲、梶原昌五、高松洋子
岩手大学大学院　畠　正機

1　目的

本報告の目的は，岩手県大槌町の「生きた証プロジェクト」の到達点ならびに社会的意味について、検討するものである。報告者は大災害による犠牲死者について、慰霊・鎮魂の各種事業や検証作業、そして記録に残そうという取り組みについて、関心を持ってきた。これまで、①仮設住宅入居者調査において「慰霊・鎮魂」を通じたまちづくりについて質問したのも、また②吉里吉里地区の自主防災計画の策定の中で「犠牲となった方がたのことを考えて防災に活かす」という段階を踏んだのも、こうしたテーマへのこだわりがあるからである。一方、大槌町では「生きた証プロジェクト」を実行する準備を進めてきた。町議会では当初賛否が分かれたものの、最終的には実施段階を迎え、報告者も委員に加えていただいた。

そこで、①生きた証を残すプロジェクトがどのような経過を経たのか、②このテーマについて大槌町民のどのような期待が込められているのか、③町外から入ってきてこのテーマに関心を注ぐ人たちは何に焦点を当てているのか、さらに、たぐいまれなプロジェクトは地域社会の取り組みとしてどのような到達点を目指しているのかについて、検討したい。また、大槌町内で得られた各種データから、この地域社会の特性を明らかにし、「弔い」「死者との対話」「検証―防災」などの論点から解釈し論述したい。

2　方法

検討の材料とするのは，①データとして大槌町仮設住宅入居者調査（2011 年、2012 年、2013 年、発表当日までに 2014 年）の結果、②大槌町吉里吉里地区等における犠牲者調査の結果、③報告者が、このテーマについて、聴き取りをしたり、意見交換をしてきた記録、④このテーマに関連する議論を展開している著述者・思想家・社会学者の言説である。

3　結果

分析の結果，大槌町には、共同で死を弔う文化が根強くある。多くの犠牲者が出たことが共同体験であったからである。住民自ら取り組む復興の課題の中に、犠牲となった方がたへの鎮魂・慰霊があり、そうしたまちづくりへの関心は総じて高い。津波被災から、救援救助、捜索・身元調査においても、警察、消防隊、自衛隊だけではなく、住民の一部は関わっている。亡くなった状況は、近隣や地域の人びととの共同的対処の一環であった。

4　結論

生きた証を残そうという取り組みは、多様な人びとの多様な思いと関わりから展開されてきたといえる。犠牲者のことを思う遺族や近親者は、死者との対話を続けている。このコミュニケーションの相互作用が、地域のまちづくりや持続性や活性化に影響を及ぼす可能性がある。相互的な関係として、①忘れない　－　忘れられたくない（そばにいる）、②送る・贈る　－　送られる・贈られる（お返しする）、③引き継ぐ　－　見守る（風をおくる）、④まちがつづく　→　←　魂があらたな生をえる（まちに戻ってくる）などの相互作用が営まれているのではないか。この論について、弔いの社会学、死の社会学、死者との対話など、これまでの社会学的な知見を集めて、さらに検討を続けたい。